

使える英語への最短ルート

—『四訂版 [データ分析] 大学入試 アップグレード UPGRADE 英文法・語法問題』—

霜 康司

1. 大学入試は変わらない！合否を分ける英文法

高校で英文法を教える時間が少なくなっても、大学入試問題から英文法は無くならない。なぜなら、大学には定員があり、0.1点刻みで点差をつける必要があるからだ。

予備校のかなり上位のクラスでも、「主語が単数形なら動詞には-sを付けるのに、名詞は複数形に-sを付けるので混乱します」と告白してくれる生徒がいる。英作文の時間でも、People is ...と書き始める生徒が1クラスに何十人もいる。生徒たちは中学校、高校では、誤りを恐れずに積極的に話したり書いたりするように推奨されてきた。ところが、大学入試では誤りをいちいち減点される。しかも、英文法の知識や独特の解法を要する英文和訳、要約、ライティングの問題が入試では重要な役割を果たしている。センター試験にあったような短文の空所補充・語句整序の問題が今も多くで大学で出題され続けている。つまり、高校で英文法を教える時間は少なくなったが、これまでと同様に、受験生は英文法から逃れられない、と言えるだろう。

2. 帰国子女の場合—連鎖関係詞節を使うと友だちを無くす？

現在の指導要領に述べられているように、自然なやり取りの中で英語を学習するのに最適な方法は、英語圏で生活することだろう。実際、帰国子女の多くは海外経験を活かし、英語を得意教科にしている。

数年前のことだが、予備校の講義の後に毎週決まって質問に来る帰国子女の生徒がいた。彼は小学校時代の6年間アメリカにいたそうで、私は毎週、彼の英文和訳を添削していた。

あるとき、私は講義で連鎖関係詞節の和訳問題を解説した。

ところが彼は首をひねっていたので、私は彼にこ

う尋ねた。

「連鎖節くらい、アメリカで普通に使っていたんじゃないの？」

「いえ、そんなの使ったら友だち無くしますよ」

そう言って彼は苦笑いをしていた。私は思わず笑ってしまった。言うまでもないが、連鎖関係詞節はアメリカでも話し言葉で使われているし、書き言葉ならばもっとよく使われている。したがって、彼の感想は連鎖節に対する正当な評価とは言えないし、おそらく彼自身だって無意識に使っているはずなのだ。ただ私が思わず笑ってしまったのは、いかにも帰国子女の生徒が言いそうなことだと思ったからである。彼は英語を暗黙的学習(implicit learning)で習得してきたから、英文和訳のような意識的・明示的な学習(explicit learning)は苦手だったということである。

3. 帰国子女にとって、語源の説明は目からウロコ？

別のクラスに、2年間アメリカの高校に通っていた帰国子女がいた。彼女は毎週200語程度のライティングを書き上げてきて、私はそれを添削していた。彼女が書くものは内容的にも表現的にもすばらしく、ほとんど直すべき箇所がなかった。ところが、珍しく彼女は次のような間違いをおかした。

an another example

私はコメント欄に、another = an + other だから、最初のanは不要だと書いたのだが、彼女はそのコメントがえらく気に入ったらしく、後で「あれは目からウロコでした」と言いに来てくれた。

このときも、ああ帰国子女らしいなあ、と私は苦笑した。少なくとも語源を意識するという明示的な学習(explicit learning)が彼女には新鮮だったのだろう。

4. 留学すれば自然に英語ができるようになる？

上に述べたようなことは、実は私の個人的な経験だけではないようだ。少し前のことだが、とある有名大学で帰国子女の学生だけを集めて英語を教えておられる先生にお話を伺う機会があった。私が「どんなことを教えておられるのですか？」と尋ねると、その先生は「英文法ばかりです。英文法が苦手な人が多くて」と仰ったが、大いに頷けるお話だった。

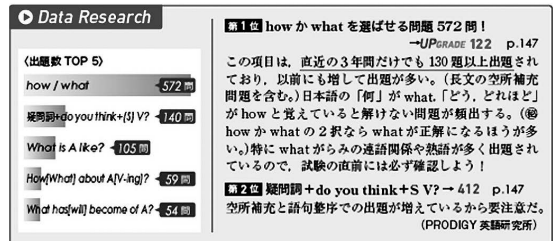
このような例を挙げたのは、英語圏で何年か生活すると自然と英文法や英語の語法が身につく、というような俗説が世間に広まっている気がするからだ。幼少期を別にして、外国で生活しても〈苦も無く自然に英語学習ができる〉わけではない。確かに、英語圏で生活すれば学習の機会は格段に増え、英語の流ちょうさ(fluency)は向上する。しかし、数年間英語圏で生活するだけでは英語を正確に運用できるようになるとは限らない。英文法に限って言えば、暗黙的な学習(implicit learning)よりも意識的に学習(explicit learning)するほうが、はるかにすばやく覚えられるのだ。

Rosemary Erlam らによる *Implicit and Explicit Knowledge in Second Language Learning, Testing and Teaching* (Multilingual Matters) という書籍には、興味深い実験がいくつも紹介されている。その結論だけを述べると、文法項目を学習させるためにはさまざまな用例を見せて帰納的(inductive)に学習させるよりも、あらかじめ絞った項目の説明を与えて、あとでその事項を実際に使わせる演繹的な(deductive)やりの方が効果的であったようだ。

この結論はおそらくほとんどの英語教師にとって受け入れやすいものではないだろうか。実際、留学経験が無くても、英検1級を取得したり TOEIC で 900 点以上をスコアしたりする生徒たちもいる。英文法でも語彙でも、彼らは意識的学習(explicit learning)によって学び、その後に演習を繰り返すという演繹的な(deductive)方法を取るしかないが、それで十分な英語の運用力を身につけているのだ。彼らが示してくれているのは、イメージ教育を受ける機会など無くとも、英語を学ぶことができるということにほかならない。

5. 英文法の近道

英文法を覚えるための近道として、『四訂版 UPGRADE 英文法・語法問題』を今秋上梓することとなった。この書籍の最大の特徴は大学入試問題を中心に徹底的にデータ分析したことにある。次の例を見ていただきたい。



—『四訂版 UPGRADE 英文法・語法問題』 p.160 より引用

ここにあるように、How か What かを選ばせる問題は、長文中の空所補充問題も含めれば直近3年間で130問以上出題されており、以前よりも増えている。これだけ多く出題される理由は、How は「どう」、What は「何」と1語1語的に覚えたせいで、How と What を使い間違える例が後を絶たないからだ。たとえば、「A についてどう思うか」という日本語に対し、×How do you think of A? と書くような誤りは、答案でも教室の内外でも、至る所で目と耳に入ってくる。内外、と申し上げたのは、留学経験のある英語の上級者が、ときどきこの間違いをするのを耳にするからである。つまり、〈頻出のポイント=上級者でも間違いやすいポイント〉なのである。

英文法は、英語のルールと例外の集積である。身につけられれば正しい英語を使えるようになるが、お経のように唱えたところで覚えることはできない。他のあらゆる技術と同様に、英語の習得には具体的な用例を含む実践的な課題(練習問題)を経験することが不可欠である。留学の機会など無く、自然な英語のやり取りの場などもない生徒たちにとってはもちろん、帰国子女にとっても、本書が英語学習の最良の近道となるよう願うばかりである。

(PRODIGY 英語研究所 主宰)